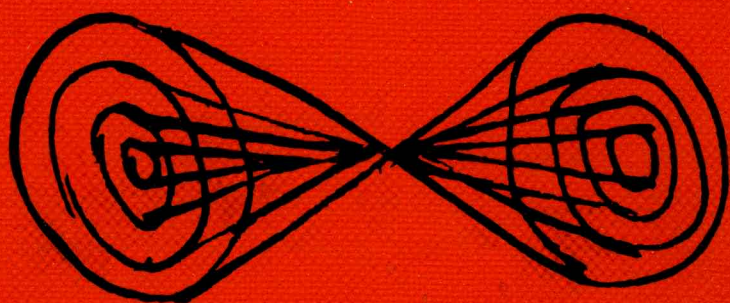




現代小説集

嫉妬 盲人たち ミリアム 悲しきカフェのうた
舞踊家 ボストンの幸福な男、祖母の指貫、ファ
ニング島 人間の運命 八月六日 センカ いま
わしい北 蝶の復讐 恩赦 馬の蹄のとどろく谷
で 海の感情 追いつめられて 蔦からむ石段
すんでしまったこと 悪い仲間 憑かれたひとび
と 金いろの狐 一切れのパン リーリャ 山上
の墓 子供と鼠 神のすごした千年 こういう夜
に 苦い蜜月旅行 豊収 歌ごえ 第二步

世界文學大系

世界文学大系 94

現代小説集

昭和 40 年 4 月 10 日発行

訳者代表 白 井 浩 司

発 行 者 古 田 晁

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話(291)局 7651

目次

嫉妬	ロブグリエ	7
盲人たち	白井浩司訳	
ミリアム	ガスカール	
悲しきカフェのうた	二宮敬訳	54
舞踊家	カポー	
ボストンの幸福な男、祖母の指貫、フアニング島	宮本陽吉訳	63
人間の運命	マツカラーズ	
八月六日	尾上政次訳	70
センカ	スウェードーズ	
いまわしい北	野崎孝訳	109
蝶の復讐	アップダイク	
	宮本陽吉訳	127
	シヨロホフ	
	横田瑞穂訳	135
	B・グロスマン	
	北垣信行訳	157
	B・ネクラースフ	
	佐々木彰訳	171
	カザコーフ	
	池田健太郎訳	188
	アンドレス	
	佐藤晃一訳	199

恩赦

馬の蹄のとどろく谷で

海の感情

追いつめられて

鳶からむ石段

すんでしまったこと

悪い仲間

憑かれたひとびと

金いろの狐

一切れのパン

リーリヤ

山上の墓

子供と鼠

林	山	坂	ラ	直	ム	米	ア	前	A	前	A	前	A	松	ポ	松	高	S	青	H	三	ノ
ブラ	ブリ	坂井	クス	野	ン	川	アン	川	・ウ	川	・ウ	川	・ウ	村	ウ	村	辻	・レ	木	・	城	サ
穰	ク	松太	ス	敦	テ	和	ン	祐	イル	祐	イル	祐	イル	達	エ	達	知	ン	順	べ	満	ッ
二	セン	郎	ネ	訳	ヤ	夫	エ	一	ソ	一	ソ	一	ソ	雄	雄	雄	義	ツ	三	ル	禧	ク
訳	ナ	訳	ス		ス	訳	フ	訳	ソ	訳	ソ	訳	ソ	訳	訳	訳	訳		訳		訳	訳
392	383	377	369	339	323	317	304	280	271	256	230	213										

神のすごした千年

こういう夜に

苦い蜜月旅行

豊収

歌ごえ

第二步

解説

ダーゲルマン
山口琢磨訳

400

デリーベス
会田由訳

413

モラヴィア
河島英昭訳

420

葉田富夫
吉田富夫訳

437

王愿堯
橋本堯訳

461

茹志鵠
吉田富夫訳

467

清水徹・大橋健三郎
木村彰一・佐藤晃一
永川玲二・直野敦
山室静・会田由
河島英昭・吉田富夫

479

裝
幀
庫
田
發

現代小説集

嫉妬

ロブグリエ
白井浩司訳

屋根の南西部の角を支えている柱の影が、いま、露台の同位角を二つの等しい部分にかけている。この露台は屋根のある広い廻廊で、家を三方からとり囲んでいる。中央の部分も両翼も広さは変らないので、柱によってつくられる影の線は、正確に、家の角に達している。だが影は、それ以上に伸びない。太陽はまだ空高く、露台の敷石だけを照しているからだ。家の木の壁、つまり正面及び西翼の切妻は、まだ屋根によつて光線がさえぎられている。(この屋根は、いわゆる母屋と露台とに共通のものなのだ。)それでいま、屋根の末端の縁の影は、母屋の角の鉛直の二面と露台とがつくりだしている直角の線に、正確に一致している。

いま、Aは、中央の廊下に面した内扉から寝室にはいった。彼女はいつばいに開かれた窓の方を見ない。その窓を通して、扉を開けたときから、露台のあの隅を見ることができるよう。彼女は、扉の方をふりむいてそれを閉める。

彼女は、相変らず明るい色のドレスを着ている。昼食のときに着ていた、とても身体にびったりとしている立襟のドレスだ。クリスチアースは一度ならずAに、身体にびったりあわない服の方が暑さをしのぎ易いことを思いださせた。だがAは、笑つてとりあわなかった。暑さに苦勞したことがないのだ。たとえばアフリカなどで、もつとずっと暑い氣候を体験したけれども、たいへん元氣にやつてゆけたのである。暑さもうだが寒さにも平氣で、どこに行つても氣楽に暮せるのだ。彼女がふりむくと、黒い髪の卷毛がしなやかに、両肩や背にふりかかる。

手すりの支えとなつていふといふ横木には、もうほとんどベンキがついていない。木の薄よごれた部分が露われ、小さな割れ目の線が縦に走っている。この横木の向う側、露台の二メートルあまり下から庭がはじまつている。

寝室の奥から眺めやると、視線は、手すりを越え、はるかに彼方、小さな谷間と向いあつた山の側面の上で、ようやく栽培場のバナナの樹の間に着陸する。みどりの大きな葉が密生した羽飾りの如きものの間には、土を見つけることはできない。しかしこの地区の栽培がはじまつたのは、かなり最近のことなので、植込みの苗の線が規則正しく交錯している有様を、まだはつきりと迎えることができる。払下げ地の、眼に見えるほとんどすべての部分において事柄は同じである。なぜなら、最も古い小農地——そこはいま、無秩序が支配しているが——は、もつと上流の、あの谷の斜面、つまり家の向う側にあ

るからだ。

同じく向う側に国道が通っている。国道は高原の縁よりも少しばかり低い。それだけが払下げ地に通じており、そこが払下げ地の北端にあたる。国道から、自動車の通れる一本の道が倉庫の列に達し、そこから更に下つて家に達する。家の前には障害物のないゆるやかな傾斜をした、広い空間があつて、車を自由に操作することができる。

家は、前方の広場と同一平面に建てられていて、家と広場との間にはヴェランダもなければ廻廊もない。ここ以外の三方は、逆に露台でとり囲まれている。

土地の傾斜は、広場から急に目立っているが、その結果、(南側の正面を縁どっている)露台の中央部分は庭よりも少なくとも二メートルは高い。

庭の周囲を、バナナの樹のみどりの塊りがぐるりととりまき、それは栽培場の境界線までつづく。

家の右手も左手もバナナの樹が近くまで迫り、露台そのものが比較的低いので、露台に立つても遠くまで視線が及ばず、樹々の配置を区別することができない。だが、谷間の奥の、五点形の植えつけは、すぐに眼にはいる。それで、ごく最近、植替えの行なわれたある小農地——赤みがかった土地が、まさに葉の繁みに場所をゆずり始めているところ——で、若い幹が一行に並び、交錯しつつ四方に規則的に伸びているさまを、ここからは楽々と眺めることさえできる。

真向いの斜面の小農地は、若芽がかなり伸びているが、観察することはもつとずつと易しい。じつさいそこは、最も都合よく眼にうつる場所であり、監視の必要などほとんどないところだといえる（もつとも、そこまで行くにはかなりの道のりを要するが）。寢室の開け放たれた二つの窓のいずれから、特に意識しないで視線は自然にその場所にむけられるのだ。

いましがた閉めたばかりの内扉によりかかってAは、見るとはなしに、手すりの剝げた木部を眺めている。それから彼女の視線は、もつと近くの窓の同じく剝げた支柱にうつり、更にもつと近くの、床の洗われた木にうつる。

彼女は寢室の中に二、三步進み、大きなタンスに近づいて、その最上段の引出しをあける。それから引出しの右側にはいつている紙片を動かして、その上に身をかがめる。底をもつとよく調べようとして引出しを手前にひく。もう一べん調べ直すと上体を起し、脇を身体につけてじつとしている。折りまげた左右の前腕は、上体に隠されているが、疑いもなく一枚の紙片を両手に持っているのだ。

眼を疲れさせずに読もうとして、いま彼女は、光の方に向きを変える。傾けた横顔はもう動かない。紙片は、たいへん薄い青いろをしていて、普通の便箋の大きさである。四つ折りにしたらしい跡がそこにはつきりといっている。

Aは、それから、手紙を手にしたまま引出しを押しもどし、小さな仕事机の方に進んでゆく。（仕事机は、二番目の窓近く、廊下と寢室を隔

てる仕切りにびつたりとくつつけて置かれている。）彼女は紙ばさみの前にすぐに坐ると同時に、そこから薄い青いろの紙片を一枚ぬきとる。最初の紙片と同一のものであるが、ただなにも書かれていない。万年筆のキャップをはずし、ちらりと右手に視線を投げる（だが、壁の抱柱はずつと後方にあるので、そのまん中にも視線は達しない）。それから紙ばさみの方に頭を傾けて、書きはじめる。

黒い、輝いている卷毛が背中中央で動かない。ドレスの金属の狭いチャックが、もう少し下のところで背骨のありかを示している。

いま、屋根の南西部の角を支えている柱の影が、露台の中央部分を横切つて、敷石の上に伸びている。家の正面の前方には、夕べの憩いのための脇掛椅子がならべられた。すでに影の線の先端は、家の正面のまん中にある入口の扉に、ほとんど達している。家の西翼の切妻では、太陽はほぼ一メートル半の高さの木部を照らしている。この側につけられた第三の窓から、万一、ブラインドがおろされていなかったならば、陽が寢室いっぱいに入ってきたことであろう。露台のあの西翼のもう一方の端は、台所に通じている。半ば開いた台所の扉から、Aの音が聞えてくる。つづいて、歌うようによくしゃべる黒人の料理人の声、それからふたたび、控え目だがてきばきした声が、夕食の支度を命じている。

太陽は、高原のいちばん突きでた先にある突起した岩の背後に、姿を消した。

Aは、この地方でつくられる脇掛椅子に谷間の方をむいて腰を下ろし、昨夜借りた小説を読む。昼食の際に、彼らはすでにその小説について語り合った。彼女は、暗くてよく見えなくなるまで、眼を離さずに読みつづける。それから、顔をあげ、その本を低いテーブルの上の手近かに置き、正面をじつと見つめる。格子の手すりや、もう一方の斜面のバナナの樹は、やがて夕闇のなかに見えなくなる。彼女は、あらゆるところからたちのぼる、くぼ地にむらがつた無数のこおろぎの鳴声に耳を傾けているようだ。しかしその声は、耳をろうするばかりの、なんの変化もない連続的な音であつて、聞くといったものではない。

夕食のために、フランクはもうそこにいる。相変らず微笑をうかべ、おしゃべり好きで、愛想のいい顔をして。こんどは、クリスチアースをつれてこなかった。子どもに少し熱があるのだ、家に残っているのだ。このごろでは、彼がクリスチアースをつれずにやってくるのも、珍しくはない。それは子どもが原因であり、またクリスチアース自身の病気のせいもあった。彼女の健康は、この暑くて湿った風土にうまく適応しないのだ。第三に、人数が多すぎ、監督のゆきとどかない使用人たちがもたらす家政上の気苦労も外出のできない理由だった。

しかし今夜、Aはクリスチアースを待っているように見えた。ともかく彼女は、四人分の食器を並べさせておいた。彼女は、使用されない食器をただちに片付けるように命じた。

フランクは、露台の上の低い肘掛椅子のひとつに深々と腰を下ろし、その坐り心地のよさについでに——以来口ぐせになった——感嘆のこたばをもらす。肘掛椅子は木製で革帯のついた簡素なもので、Aの指示にもとづいて原住民の職人がつくったものだ。彼女はフランクの方に身をかがめて、グラスをさし出す。

いますっかり暗くなつたのに、彼女はランプを持ってこないようにいった。ランプは蚊を呼びよせるといふのが彼女の言い分だ。グラスには、ほとんど溢れるばかりに、コニャックとソーダ水が注がれ、立方形の氷が浮いている。完全な暗闇の中で、下手に身体を動かしてグラスの中身をこぼすといけなから、彼女は、フランクのためのグラスを右手で注意深く握り、彼が坐っている肘掛椅子にできるだけ近づいた。彼女はもう一方の手を椅子の肘にのせ、ほとんど頭と頭とがふれ合うほど、彼の方に身をかがめる。彼はなにごとかを囁く。おそらく、感謝のことばだろう。

柔らかな身のこなしで上体を起こすと、彼女は三番目のグラスをとり——こんどは、前ほどいっぱいではないから、こぼすおそれはない——フランクの隣りに腰を下ろしに行く。その間、フランクはトラクタの故障についてここに着いて以来話しつつづけている。

今夕、露台に肘掛椅子を運ばせたとき、椅子の配置を決めたのは、彼女自身だった。フランクのものとは指定された椅子と、彼女の椅子とは、事務室の窓の下——もちろん、寢室の壁とすれ

すれに——隣り合せて置かれている。フランクの椅子は彼女の椅子の左手にあり、右手の少し前寄りには、酒臺サウダが置かれている小テーブルがある。残りの二つの椅子は、先の二つの椅子と露台の手すりとの間の眺望を損なわないように、このテーブルの向う側の、更に右寄りに並べられた。同じく《眺望》の理由から、これら残りの二つの椅子は、他の椅子の方に向けられてはいない。それらは、格子の手すりとは谷間の上流とを、斜めから見のように置かれている。この配置のために、それらの椅子に坐る人たちは、Aを——特に、いちばん遠くの四番目の椅子から——見ようとする場合、首をひどく廻さなくてはならない。

三番目の椅子は、金属のチューブに布を張つた折疊椅子だが、それは四番目の椅子とテーブルとはさまれて、明らかにうしろにずらしてある。しかし、このあまり安楽でない椅子は、空いたままだ。

フランクの声は、彼の栽培場に関する一日の苦勞を語りつつづけている。Aはその話に興味を抱いているように見える。ときおり、彼女は、彼女の関心を証明する二、三のことばで、彼をばげます。沈黙の合間に、小テーブルの上にグラスを置く音が聞える。

手すりの向う側、谷間の上流の方には、ただ、こおろぎの音と、星ひとつない夜の暗さがあるにすぎない。

食堂には、二つの石油ランプが輝いている。ひとつは細長い食器戸棚の左端に、もうひとつ

は食卓の上の、四番目の客の空席の場所に置かれている。

食卓は、継足し板が（これほど小人数では不必要だから）使われていないので、正方形をしている。三組の食器が三方を占め、ランプが四番目を占めている。Aは、いつもの席に坐り、フランクは彼女の右手に——したがって食器戸棚の前に坐る。

食器戸棚の上には、二番目のランプの左側に（つまり、台所に向かって開かれた扉の側に）、食事の際に使われる清潔な食器類が重ねられている。ランプの右うしろには、壁にくっついてこの地方特産の素焼の壺が置かれ、そこが戸棚の中央である。さらに右寄りには、壁の灰いろの塗装の上に、男の頭の、輪郭のぼやけた大きな影が映っている。フランクの頭だ。彼は上衣も着ずネクタイもつけていない。ワイシャツの襟は、ボタンをはずして大きく開かれている。しかしそのシャツは、上質の細い繊維でつくられた、非のうちどころのない白シャツで、折返し袖口は、象牙のカフスボタンでとめられている。

Aは、昼食のときと同じ服装だ。フランクはクリスチアアースがAの服装を、「この地方では暑苦しさすぎる」と批評したとき、ほとんど口論せんばかりだった。だがAは、笑つてとりあわなかった。「それに、ここの気候はそれほど我慢できないほどじゃありませんわ」と、彼女はその問題にけりをつけようとしていった。「カンダで、一年のうち十カ月の間、どんなに

暑いかを御存知でしたらね……」そこで、しばらく会話はアフリカのことに限られた。

台所の開いた扉から、ボーイが両手にポタージュでいっぱいのスプ鉢を持ってはいって行く。ボーイがそれを分け終わると、Aはすぐに、食卓の上にあるランプをどけさせる。光がまぶしすぎて眼が痛くなる、というのだ。ボーイはランプの把手を持って、Aが左手をのばして指示した、部屋の反対の端の家具の上へ持つて行く。

こうして、食卓は薄闇のなかに沈む。主な光源は、食器戸棚の上に置かれたランプだけだ。二番目のランプは、反対の方向に移されたので、いまでは、あまりに遠すぎるのである。

台所側の壁の上のフランクの頭の影は消えた。彼の白シャツは、ついまいしがたのように、もはやどぎつい照明の下で光り輝くことはない。ただ右手の袖だけは、背後から四分の三ほど、光に照らされている。肩と腕が、明るい線で縁どられ、さらに上方の、耳や首もやはりそうなっている。顔はほとんど逆光線の位置にある。「このほうがおよろしくなくて？」と、Aは彼の方を向きながらたずねる。

「ずつとうちとけますね」と、フランクは答える。彼は素早くポタージュを飲みこむ。別に大げさな仕種をするわけでもなく、礼儀正しい手つきでスプーンをにぎり、音もたてずに液体を流しこむのであるが、彼はそうしたなんでもない仕種を、馬鹿らしいほど熱心に力をこめてやっ

ているように見える。どこがそうだとおぼつきりいうことはできないが、あきらかに彼は、なにか、いちばん大事な規則を無視し、ある特別の点では慎しみに欠けているのだ。

いちじるしい欠点がすべて避けられていても、彼の振舞はやはり人目につかずにはおられない。いや、かえって逆に彼の振舞は、Aが、いましがた彼と同じ動作をし終えたことを、証明せざるをえない。彼女は、動いたような素振りも見せず、——しかも、異常なほどに身体を動かさないことで、人の注意をひくこともなかった。彼女もやはりポタージュを飲んだことは、空になった、しかし汚れているその皿をちらりと見ればすぐにわかることだ。

それに、記憶をたどって、彼女の右手や唇のいくらかの動き、皿と口との間のスプーンの往き来などを思い返せば、そういうことに意味があったと気付かれよう。

さらに確証が必要なら、料理人がポタージュに塩をきかせすぎはしなかったかと、彼女にたずねればいい。

「そんなことないわ」と、彼女は答える。「汗をかかないようにするには、塩を食べるべきですもの」

よく考えてみれば、この答はなにも、彼女が今日、ポタージュを味わったということを絶対的に立証することにはならない。

いま、ボーイは皿を片付ける。こうして、Aの皿の汚れの跡を——あるいは、彼女がポタージュを飲まなかったのなら、それらの跡がなか

ったことを——二度と確かめることが不可能になる。

会話はふたたび故障したトラックの話にもどった。フランクはもうこれからは、中古の軍需品を購入しないだろう。最近買ったものが、ずいぶん苦勞の種になったからだ。こんど車を一台とり代える場合には、新車にしよう。

しかし、新型のトラックを黒人の運転手に任せるのは考えものだ。黒人だって、白人と同じくらい早く、あるいは白人以上に、車をだめにしてしまうだろう。

「それにしても」と、フランクはいう。「モーターが新しければ、運転手はそれにさわるには及びませんからね」

ところが、事實はそれと正反対であることを知る必要がある。新しいモーターは、新しいだけに、いっそう心をそる玩具になろうし、それに、悪い道路の上でスピードを出しすぎたり、ハンドルで軽業をやってみたり……。

三年間の経験から、フランクは黒人の間にも、慎重な運転手がいると考えている。Aも、もちろん、同じ意見だ。

彼女は、機械の強さの比較に関する議論の間は、ことばを控えているが、運転手の問題になると、かなり長い、しかも断定的な発言を行なう。

もっとも、彼女のいうことは正しいかもしれない。こういう場合、フランクの言い分もやはり正しいことになるにちがいない。

二人はいま、Aが読んでいた小説のことを話

し合っている。小説の舞台となるのはアフリカである。女主人公は（クリスチアーヌのように）、熱帯の風土に耐えられない。暑さのために、彼女は本当に病気になるてしまいそうなのだ。

「ああいったことは、なによりも気のせいですよ」と、フランクはいう。

つづいて彼は、その本をひもといたことがない者にはほとんど理解できない、良人の行動をほめかす。彼のことは、「それを擲まえる」、あるいは「それを学ぶ」ことができるといった文句で終るが、誰のことか、それともなんのことか、はつきり断定することができない。フランクはAを見つめ、Aもフランクを見つめている。彼女は彼に素早い微笑を投げかけるが、それはすぐに薄闇の中に吸い込まれてしまう。彼女は物語を知っているから、フランクのいったことがわかったのだ。

いや、彼女の表情は動かなかった。ずいぶん前から微動だにしないかった。唇はさきほど話し終えてから、固く結ばれたままだった。束の間の微笑と見えたものは、ランプの反映か、蝶の影だったにちがいない。

それに、そのとき、彼女はもうフランクの方を向いていなかった。彼女は、顔を食卓の軸にもどしたところであり、正面のなにも掛かっていない壁の方をまっすぐに見つめていた。壁には、先週、つまり月はじめか、それとも先月、あるいはそれより後で、潰されたむかでの跡が黒いしみとなって残っている。

フランクの顔は、ほとんど逆光線の中にあるので、なんの表情も示していない。

ボーイが皿を片付けにはいつてくる。Aはいつものように、露台上にコーヒーをだすことを命じる。

露台は、完全に真つ暗だ。もう誰も口をきかない。こおろぎの声もだえた。そこかしこから、夜の肉食獣のかすかな叫び、こがね虫の鈍い羽音、低いテールブルの上に陶器の小さな茶碗を置く音だけが聞える。

フランクとAは、家の木の壁に背をむけている、二つの同じ脇掛椅子に坐った。金属のチューブでできた椅子は、依然空席のままだ。四番目の椅子の位置は、谷間を眺めることができないまとなつては、なおさら理屈にあわない（夕食前の短いそれがれの間でも、手すりの格子があまり狭すぎるので、景色を十分に眺められなかった。それに、視線は、支えの横木越しに、空に出会うだけなのだ）。

手すりの木は、指を木目や縦の小さな割れ目にそつてすべらせるとき、なめらかな感触を与える。つぎにぎざぎざの木肌があり、それからふたたび、平らな表面が現われるが、こんどは筋がまつたくない代りに、ところどころペンキが薄く剥けた、でこぼこの部分が点在している。昼間だと、二種類の灰いろ、裸木の灰いろと、もう少し明るい剥け残っているペンキの灰いろとの対照は、ほとんどのこぎりの歯のようにでこぼこの輪郭を持った、複雑な図形を描きだす。支えの横木の上には、ペンキの最後の残りでで

きている突起した小鳥がところどころにあるだけだ。ところが、手すりの上のペンキの剥けた部分は、もつとずつとわずかで、だいたい、高さの半分ほどのところにあり、それがくぼんだ汚点をつくっている。指でそこをさわると、木部の垂直のひび割れが感じられる。板の端の部分では、新しいペンキのうろこが、剥がれやすくなっている。剥がれた縁の下に爪を押しこんで、指骨を曲げてこじあげればいいのだ。ほとんど抵抗は感じられない。

向う側に、闇になれた眼は、いま家の壁から明い形が浮きだすのをみとめる。フランクの白いシャツだ。彼の前腕は両方とも、水平に脇掛の上に置かれている。上半身は、椅子の背にもたれて、うしろに傾いている。

Aはダンス曲を口ずさむ。歌詞はほとんど理解できない。だがフランクにはわかるかもしれない。おそらくはAと一緒にしはしは聞いていて、もう知っているとするればだ。もしかすると、彼の好きなレコードのひとつかもしれない。

Aの両腕は、服地の青白い色合いのために、隣りの男の腕ほどはつきりしてはいないが、同じように脇掛の上に置かれている。四本の手は、一列に並んで動かない。Aの左手とフランクの右手の間隔は、ほぼ十センチほどだ。夜の肉食獣のかすかな叫びが、鋭くかつ短く、谷間の奥のどこかで、ふたたび鳴りひびく。

「そろそろおいとましましょう」と、フランクがいう。

「いいじゃありませんか」とすぐにAが答える。

「まだそんなにおそくありませんわ。こうして
いると、とてもいい気持ですわ」

ほんとうに帰りがかったら、フランクにはも
つともな理由があるはずだ。家には妻と子ども
しかいないからである。しかし彼は、ただ翌朝
早起きをしなければならないというだけで、ク
リスタアヌのことにはまったくふれない。前
と同じ鋭く短い叫び声が、しだいに近づいてき
て、いまでは東側翼の露台のすぐ下の庭から聞
えてくるように思われる。

同じ叫びが、こたまのように、反対の方向か
らそれにつづく。国道の上の方から、他の叫び
がそれに答える。さらに他の叫びが、くぼ地の
方から聞える。

時折、その叫び声は、もっと低くなったり、
あるいは長くなったりする。おそらくいろんな
種類の獣がいるのだらう。だが、叫び声はすべ
て似かよっている。それらが容易にそれとわか
る共通の性格を持っているのではなく、むしろ、
それには共通の性格の欠除があるというべきだ
らう。それらは瘁猛な、あるいは苦痛の、ある
いは強迫的な、あるいはまた愛の、叫び声のよ
うにはききとれない。いわば、はつきりした理
由もなく発せられた、機械的な叫び声のような
もので、なんの意味も表わさず、ただ、夜の旅
路の標尺となるべき、それぞれの動物の存在や、
位置や相互の移動を示しているにすぎないのだ。
「とにかく」と、フランクはいう。「おいとま
しましょう」

Aは答えない。二人はともに身動きしない。

二人は隣り合って坐り、上半身を脇掛椅子の背
にもたせてうしろに傾け、両腕を脇掛の上に並
べている。彼らの四本の手は、同じ位置の同じ
高さで、家の壁に平行して一列に並んでいる。

寝室側の露台の角にある、南西部の柱の影が、
いま、庭の土の上にまで伸びている。太陽は東
天にまだ低く、日光はほとんど斜めに谷間に射
している。谷間の軸に対して斜めに並んだバナ
ナの樹の列は、この照明をうけて、いたるところ
ではっきりと姿を現わす。

家が建てられている側面と反対側の側面上の
植込みの苗は、低部から最上部の最高の境界線
まで、かなり容易に数を数えることができる。
とりわけ家の正面は、その地点に位する小農地
の年齢が若いので、数えることは容易である。
不況のために、ここでは大部分の土地が開墾
された。現在ではもはや、高原の縁に、約三十
メートル幅の未開墾地が残っているにすぎない。
その高原は、突起も裂け目もない円い岩によつ
て、谷間の側面と連結している。

未開墾地帯とバナナ園との境界線は、完全に
直線ではない。それは、交互にひっこんだり、
とびだしたりする角度を持った波線である。そ
の波線のそれぞれの頂点は、時代を異にするが、
ほとんど同じ方向を向いた、別々の小農地に属
している。

家の真正面の樹々の繁みは、この地区での最
高の耕作地点を示している。そこでどんづまり
となっている区画は長方形である。大地は、み

どりの葉の羽飾りにかくれてもはや見えないか、
あるいはほとんど見えない。しかし、根元のぜ
んぜん狂いのない直線は、それが最近栽培され
たばかりで、まだひと房も収穫がなかったこと
を示している。

この区画の上流の部分は、樹木の繁みからは
じまり、最大の傾斜を（左方に向かって）わず
かにそれながら下降する。そこには、小農地の
下の境界線まで、三十二本のバナナの樹が一列
に並んでいる。

バナナの配列を同じのまま、この小農地を下
に延長すると、もうひとつの区画が、最初の区
画と、その底辺を流れている小川との間の空間
全部を占めている。この区画は、その頂点に、
わずかに二十三本の苗しか持っていない。ただし、
それらはずっと生長していて、前述の苗とは見
わけがつかず、幹の丈も少し高く、葉並みは錯綜
し、よく実った数多くの房がついている。それ
に、すでにいく房かは切り取られている。だが、
根元から幹を切り倒したあとの空席は、薄いみ
どりの大きな葉の羽飾りをつけ、果実をぶ
らさげてしまった太い枝をのぼしている苗その
ものと同じくらい、容易に見わけがつく。

そのうえこの小農地は、上にあるもののよう
に長方形をしていず、梯形である。なぜなら、
底辺を形づくる川岸は、互いに平行しているそ
の両側——上流と下流——に対して、垂直では
ないからである。右側（つまり下流）には、バ
ナナの樹は二十三本ではなく、十三本しかない。
最後に、底辺は、小川が直線をなしていない

ので、直線ではない。この区画は、横の中央部あたりで、あまり目だたないふくらみによってせめられていた。したがって列の中線には、真の梯形だった十八本の苗があるべきなのに、十六本しかない。

最左端から数えて二列目には（五点形の植えつけの配置からいって）、長方形の区画の場合には二十二本の苗があるはずである。また、正確に梯形の土地であっても、二十二本のはずである。というのは、底辺がほんの少しちぎまっても、ほとんど感知できないだろうからだ。そして、事実、そこには二十二本の苗がある。

しかし三列目は、やはり長方形だったら二十三本あるべきだろうが、二十二本しかない。ここまでだと、川岸の彎曲^{わまぎ}によっても、なら補足的な差異は生じない。四列目についても同様のことがいえる。つまり、仮定の長方形の偶数目の線よりも、一本だけ少ない二十一本となっている。

川岸の彎曲は、五列目から作用を開始する。それでこの列は、ほんとうの梯形の場合なら二十二本、長方形の場合なら（奇数目の線なので）二十三本あるべきところ、じっさいには二十一本しかない。

この数字自体は理論上のものである。というのは、いくらかのバナナの樹は、房が熟して、すでに地面から切り取られているからだ。それでじっさいに四列目を構成しているのは、十九本の葉の羽飾りと、二本分の空席である。そして五列目は、二十本の羽飾りと一本分の空席――

つまり、下から上へ向かつて、八本の葉の羽飾り、一本分の空席、それから十二本の葉の羽飾りといった具合だ。

じっさいに目撃できるバナナの樹と、切り取られたバナナの樹との配列に留意しなければ、六列目はつぎの如き数字を示すだろう。二十二本、二十一本、二十本、十九本――この数字はそれぞれ、長方形、真の梯形、底辺の彎曲した梯形、最後に、収穫により切り取られた幹を引いたあとの梯形を現わすものである。

以下の列は次の如き数字となる。二十三本、二十一本、二十一本、二十一本。二十二本、二十一本、二十本、二十本。二十三本、二十一本、二十本、十九本、等々……。

この区画の下流の境界線となる小川にかかった丸木橋の上に、一人の男がうずくまっている。青い色のズボンと、肩をむきだしにした無地の袖なしメリヤスシャツを着た原住民だ。彼は水面にかがみこんで、底のなにかを見ようとしているようだ。しかし、水量は非常に少ないにしても、水は決して透明ではないので、それはまったく不可能である。

谷間のこの斜面の上には、小農地がひとつだけあって、小川から庭まで達している。傾斜の角度はかなりゆるやかであるにもかかわらず、そこバナナの樹は、露台の高さからやはり容易に数えられる。これらの樹は、最近新しく植えて代えられただけあって、この地帯の中でも、とくに若い樹だ。苗の線がまことに規則正しいばかりでなく、幹の高さもまだ五十七センチには

達していないし、幹の先についている葉の繁みも、互にかぶさるまでになっていない。また、谷間の軸に対する線の傾斜度（約四十五度）も、やはり数を数えるのを容易にしている。

丸木橋から右手にはじまっている一本の斜めの列は、庭の左隅に達している。その列を縦に数えると、三十六本の苗がある。五点形の植えつけの配置からいって、これらの苗は、さらに三つの異なった方向に並んでいるように見える。まず、先にあげた第一の方向、つまり、斜めの列と垂直に交わるものと、お互いに垂直に交差し、先の二つの線と四十五度角をつくっている二つの線とである。したがって、後の二本の線は、谷間の軸――および庭の底辺――に対して、一つは平行であり、もう一つは垂直であるわけだ。

庭は、いまのところ、ごく最近耕された裸の狭い地面にすぎず、Aの求めに応じて植えられた、人の丈よりも少し低い、やせた一ダースばかりのオレンジの若木が植わっているだけである。

家は、庭の横幅全部にわたっているわけではないので、四方とも、バナナの樹のみどりの塊りからは隔てられている。

西側の切妻の前にある木立のない土地に、家の歪んだ影が伸びている。屋根の影は、角の柱の斜めの影によって、露台の影と接続している。手すりの影は、ほとんど隙間のない一本の帯となっているが、じっさいの格子相互の間隔は、格子そのものの平均の厚みよりも決して狭いも

のではないのだ。

格子は、ろくろ細工の木製で、中央にふくらみがひとつあり、両先端に、それぞれひとつずつ、もっと小さい付帯的なふくらみがついている。ペンキは、支えの横木の上で、ほとんど完全に剥げ落ちているが、格子のふくらみの部分でも同じように剥がれかかっている。露台のほうの、ふくらんだ部分のそのふくらみも、大部分、色が剥げ落ちて木部をさらけだしている。年月のために色褪せた、剥げ残った灰いろのペンキと、湿気的作用により灰いろとなった木の間に、ところどころ、赤みがかった褐色の小さな表面が姿を見せている。それは木部の本来の色であって、最近、新しいうろこが落ちたために現われたのである。手すり全体を鮮かな黄いろに塗り直すべきだ、とAは決めている。

彼女の寝室の窓はまだ閉ざされている。ただ、ガラス扉の代りにさげられたブラインドだけが十分な光線を室内にいれるために、最大限に開かれていて。Aは右手の窓によりかかり、ブラインドの裂け目から、露台の方を眺めている。男は相変らず、土に覆われた丸木橋の上で、泥水の方に身をかめたまま動かない。彼は、頭をたれてうずくまり、前腕を腿にもたせかけ、両手を開いた膝の間からたらし、微動だにしない。

彼の前の、小川に沿った向う岸の小農地には、数多くの房が熟してもぎとられるのを待っている。この地区では、すでに幾株も収穫されている。それらの空席は、幾何学的な列のなかで、

きわめてくつきりと際立って見える。だが、もっとよく見ると、古い株の数十センチ近くのところ、切り取られたバナナの樹の代りとなる若芽が、すでに大きくなり、五点形の理想的な正確さを乱しはじめていることがわかる。谷間のこちら側の斜面にある国道をのぼってくるトラックの音が、家の向う側から聞えてくる。

Aのシルエットは、寝室の窓のうしろで、ブラインドのために水平の薄片に裁断されていたが、いまや見えなくなってしまう。

トラックは、高原を中断する岩の突起のちょうど真下にあたる、国道の平坦の部分に達すると、スピードを変え、前ほどざわがしいうなりを立てないで走りつづけている。つぎにその音は東の方に向かい、固い葉並みの樹々が点在する茶色の未開墾地を越え、それにづくフランクの仏下駄地の方へ遠ざかるにつれて、しだいに小さくなる。

寝室の廊下に最も近い窓は、両開きになっていて、Aの上半身がその枠の中にはいっている。彼女は、「お早う」という。よく眠り、上機嫌でめざめた人の楽しげな口調である。少なくとも、心配事があってもそれを顔にださず、主義としていつも同じ微笑を見せびらかす人の口調である。その同じ微笑の中には、信頼と愚弄とが、それとも感情の全的な欠除が読みとれる。それに、彼女はいましがためざめたばかりではない。明らかに、もうシャワーをすませている。朝の部屋着を身にまとっているものの、唇

は、自然色に近いが少しばかり一本調子の色合いの口紅で化粧され、入念にくしげずられた髪は、頭を動かすたびにしなやかで重い巻毛となつてゆらめき、その黒い塊りが肩の白い絹の上にふりかかるとき、窓からはいつてくる朝の光にきらきらと輝く。

彼女は、突き当りの仕切り壁にびつたりとつけられた、大きなタンスの方に向かう。その最上段の引出しをあけると、小型の品物をそこからとりだし、光の方に身をもどす。丸木橋の上にうずくまっていた原住民の姿はもう見えない。あたりにはまったく人影がない。いまのところ、この地区では、一組も作業をしていないのだ。

Aは、右手の、廊下との仕切りに並んで置かれている小さな文机の前に坐っている。前にかがみこんで、なにか細かい仕事を長くつづけている。とても華奢な靴下の編み目をかがり直しているのか、爪を磨いているのか、短くなった鉛筆で絵を描いているのか。だがAは、いままでに絵を描いたことは一度もない。糸の編み目をかがるのだったら、もっと明るい場所に坐ったことだろう。爪を磨くためにテールが必要だったら、あんな文机なんか選ばなかっただろう。

頭や肩は動かないように見えるが、髪は黒い塊りは急激な振動のために揺れうごく。ときどき、彼女は上半身を起こし、仕事の出来具合をよく見きわめるかのように、のけぞる。そして物憂い仕度で、邪魔になる短い髪束をうしろに払う。髪をあまり動かしたので、それがはず